

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K03161

研究課題名（和文）メンタライズ機能に注目したアレキシサイミアの臨床介入ツール開発

研究課題名（英文）Development of a clinical intervention tool for alexithymia focusing on the mentalizing function.

研究代表者

馬場 天信（BABA, Takanobu）

追手門学院大学・心理学部・教授

研究者番号：00388216

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、Mentalized Affectivity Scale日本語版を作成し、信頼性と妥当性を検討した。アレキシサイミアは、ProcessingやIdentifyingのメンタライズが不得意であり、対人ストレスが高いが、対人スキルが低く、援助要請過剰か援助要請自立が高いことを明らかにした。また、母親から受容とモニタリング体験が少なく、心理的統制が高く、アタッチメント回避や不安が高く、二者関係に関する対象関係の問題が中心となることを明らかにした。自他分離が難しい対人関係パターンに焦点化し、IdentifyingやProcessingの感情メンタライズを促すことが重要であることを示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アレキシサイミアは心理志向性が低く、心理療法的介入が困難であると言われている。本研究では、アレキシサイミア傾向者が過去や現在の状況に対する感情やそれを調整するメンタライジング機能に働きかけることや、ストレスを高める状況の中で過去の母子関係に由来する二者関係の対人テーマを焦点化することが効果的であることを明らかにした。今後、心理学的介入マニュアルの作成が期待された。

研究成果の概要（英文）：In this study, we created a Japanese version of the Mentalized Affectivity Scale and confirmed its reliability and validity. We found that alexithymia is dysfunctional in emotional mentalization related to Processing and Identifying, experiences high interpersonal stress, but has low interpersonal skills and high help-seeking excess or help-seeking independence. The study also revealed that they experienced low acceptance and monitoring, high psychological control from their mothers, high attachment avoidance and anxiety, and mainly object relations problems related to dyadic relationships. We suggested that it is important to focus on interpersonal relationship patterns that make it difficult to separate self and others, and to promote emotional mentalization of Identifying and Processing.

研究分野：臨床心理学

キーワード：アレキシサイミア メンタライジング メンタライゼーション 感情 対人スキル 関係論的アプローチ 対峙関係アプローチ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

アレキシサイミア (Alexithymia) は、感情の認識や描写が困難であり、内面よりも外的事実関係に注目した認知様式を有する感情制御の障害に関するパーソナリティとして現在は定義づけられている。この概念はもともと心身症患者が精神力動的な心理療法の適用が困難であることから Sifneos (1973) が提起した概念であるが、もともとは心理志向性が乏しく、夢を代表とするような想像機能の問題も含みこまれた特徴であり、現在も心身医学領域での心理療法適用可能性を考える際にアレキシサイミア傾向を有する患者にどのようにアプローチするかが議論されている。

そのためには、まず、メンタライゼーション研究の流れの中で Greenberg et al (2017) が開発した Mentalized Affectivity Scale (メンタライズされた感情認識尺度) 60 項目版の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を確認する必要がある。その研究グループの代表研究者であり臨床家である Jurist に許可を得て信頼性と妥当性の伴ったこの尺度の日本語版を作成することが重要であり、その後、幾つかの対人関係、対象関係に関する尺度を用いてアレキシサイミア傾向者の対人関係の特徴を計量的に記述することが必要となる。

### 2. 研究の目的

本研究では、これらの特徴を有し、心理療法にのりにくい患者に対する心理学的支援・介入の新たなアプローチを探る糸口として、近年、精神療法アプローチとして注目されているメンタライゼーションの考えに基づいて開発されたメンタライズされた感情認識と、対人関係療法で注目している対人関係や対象関係への介入を取り入れたアレキシサイミア傾向者への介入マニュアル作成の基礎データを提供することを具体的な目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、臨床応用を前提とした基礎研究であるため、以下の全ての調査は一般成人を対象とした Web 調査で実施した。調査の実施は調査会社に委託し、調査内容と手続きについては本学の倫理委員会の承認を得ている。調査モニターは、調査協力内容の回答項目負担に応じ、商品購入等に還元することが可能なポイントが謝礼として与えられた。

#### 【調査 1】MAS 日本語版の信頼性・妥当性の検討

**被調査者:** 20 歳から 50 歳未満の一般成人を対象とした調査を調査モニター会社に委託し、IC に同意し Web 調査に協力した 695 名 (男性 350 名、女性 345 名、平均年齢 35.55 歳、SD=8.11) を調査の被調査者とした。

#### 調査尺度:

##### (1) MAS 日本語版 60 項目

原版 MAS60 項目を共同研究者の上地が日本語に翻訳。その後、バイリンガルの臨床心理士 2 名および国際学会で通訳ができるレベルの臨床心理士 1 名に校閲を依頼し、3 名による合議で訳文が修正され、Jurist に日本語翻訳版の使用許可を得たものを使用した。

##### (2) 自尊感情尺度 (山本他, 1982) の 1 因子 9 項目。

Rosenberg et al (1955) の 10 項目から内的整合性の問題から 1 項目を除外した 1 因子 9 項目。

##### (3) Emotion Regulation Questionnaire 日本語版 (吉津他, 2013; ERQ-J) の 2 因子 10 項目

再評価方略 (Reappraisal) と抑制方略 (Suppression) の 2 因子を測定するものを使用。

##### (4) TAS-20 日本語版 (小牧他, 2003; TAS-20) の 3 因子 20 項目

感情の同定困難、感情の伝達困難、外的志向の 3 因子。

#### 【調査 2】MAS 日本語版の再検査信頼性の検討

**被調査者:** 調査 1 に参加協力した被調査者に対して、3 か月半後の再テスト信頼性調査の協力を依頼し、同意が得られた 217 名 (男性 109 名、女性 108 名、平均年齢 35.75 歳、SD=8.17)。

#### 使用尺度:

調査 1 で使用した (1) (2) (3) を使用した。

#### 【調査 3】MAS 妥当性検討のための親の省察機能質問票 (PRFQ) 日本語版作成

**被調査者:** 0~5 歳の子どもをもつ母親 318 名 (平均年齢は 36.68 歳、SD=4.65) であった。

#### 使用尺度:

##### (1) 親の省察機能質問票 (試案)

Luyten et al. (2017) の "Parental Reflective Functioning Questionnaire (PRFQ)" (18 項目版) を共同研究者の上地が翻訳し、バイリンガルの臨床心理士 2 名および国際学会で通訳ができるレベルの臨床心理士 1 名に校閲を依頼し、3 名による合議で訳文が修正された。日本語訳され

た 18 項目を「親の省察機能質問票日本語版」(試案)(Parental Reflective Functioning Questionnaire-the Japanese Version: PRFQ-J)と呼ぶことにした(7 件法)。

(2)視点別意識尺度(津田, 2010)

自己に対する意識, 他者から見た自己に対する意識, 他者に対する意識という 3 つの視点別意識尺度である。「自己の内面への意識」計 7 項目と「他者の内面への意識」計 8 項目(5 件法)。

(3)邦訳尺度 Parental Self-Agency Measure (以下 PSAM)(田坂, 2013)

Dumka et al.(1996)の PSAM を田坂(2003)が日本語化した尺度であり、幼児期の子どもをもつ母親の育児自己効力感を複数の領域に分けずに 1 領域とみなして測定する日本語版は 1 下位尺度で構成されている。

(4)TAS-20 日本語版

アレキシサイミア傾向を測定するために小牧・前田他(2003)が作成した TAS-20(The twenty-item Toronto Alexithymia Scale)を用いたが、「感情の同定困難」「感情の伝達困難」「外的志向」の 3 下位尺度で構成されている(5 件法; 20 項目)。

#### 【調査 4】MAS 日本語版の妥当性検討およびアレキシサイミアの対人ストレスと援助要請の検討

**被調査者:** 20 代から 40 代までの一般成人 517 名(男性 256 名、女性 261 名、平均年齢 35.67 歳、SD=8.39)であった。

**使用尺度:**

(1)MAS 日本語版 41 項目

調査 1 および調査 2 で使用した MAS 日本語版 60 項目のうち、確認的因子分析および探索的因子分析を行った検討段階において削除されることが確実な 19 項目を除き、今後の分析で使用される可能性がある項目を残した 41 項目を使用した。

(2)自尊感情尺度(山本他, 1982)の 1 因子 9 項目

Rosenberg et al.(1955)の 10 項目から内的整合性の問題から 1 項目を除外した 1 因子 9 項目。

(3)Emotion Regulation Questionnaire 日本語版(吉津他, 2013; ERQ-J)の 2 因子 10 項目

再評価方略(Reappraisal)と抑制方略(Suppression)の 2 因子を測定するものを使用。

(4)TAS-20 日本語版(小牧他, 2003; TAS-20)の 3 因子 20 項目

感情の同定困難、感情の伝達困難、外的志向の 3 因子で国際的に使用されているアレキシサイミア傾向の測定尺度である。

(5)援助要請スタイル尺度(永井, 2013)

援助要請自立型、援助要請過剰型、援助要請回避型の 3 因子を測定する 15 項目(7 件法)。

(6)成人用ソーシャルスキル尺度(相川・藤田, 2005)

関係開始、解読、主張性、感情統制、関係維持、記号化の 6 因子 35 項目を使用した。

(7)対人ストレスサー尺度(高橋, 2013)

被拒否、被攻撃、加害、関係理解不能の 4 因子(5 件法)を使用した。

(8)心理的ストレス反応尺度(鈴木他, 1997; SRS-18)

抑うつ・不安、イライラ・怒り、無力感の 18 項目 3 因子(4 件法)を使用した。

#### 【調査 5】アレキシサイミア傾向者の対象関係、対人関係の特徴の検討

**被調査者:** 20 代から 40 代までの一般成人 512 名(男性 254 名、女性 258 名、平均年齢 35.27 歳、SD=8.69)であった。

**使用尺度:**

(1)MAS 日本語版 41 項目

調査 1 および調査 2 で使用した MAS 日本語版 60 項目のうち、確認的因子分析および探索的因子分析を行った検討段階において削除されることが確実な 19 項目を除き、今後の分析で使用される可能性がある項目を残した 41 項目を使用した。

(2)TAS-20 日本語版(小牧他, 2003; TAS-20)の 3 因子 20 項目

(3)対人ストレスサー尺度(高橋, 2013)

(4)心理的ストレス反応尺度(鈴木他, 1997; SRS-18)

(5)日本語版 Ten Item Personality Inventory(小塩他, 2012; TIPI-J)

Big Five の主要 5 因子である外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性を測定する 10 項目(7 件法)。

(6)青年期用対象関係尺度(井梅他, 2006)

親和不全、希薄な対人関係、自己中心的な他者操作、一体性の過剰希求、見捨てられ不安の 5 因子の 29 項目を使用した(6 件法)。

(7)対人依存欲求尺度(竹澤・小玉, 2004)

情緒的依存と道具的依存の 2 因子 23 項目を使用した(5 件法)。

#### 【調査 6】養育経験がアレキシサイミアおよびメンタライズされた感情認識に及ぼす影響

**被調査者:** 20 代から 30 代までの一般成人 520 名(男性 259 名、女性 261 名、平均年齢 30.45 歳、SD=5.39)であった。

**使用尺度:**

(1)MAS 日本語版 41 項目

調査1および調査2で使用したMAS日本語版60項目のうち、確認的因子分析および探索的因子分析を行った検討段階において削除されることが確実な19項目を除き、今後の分析で使用される可能性がある項目を残した41項目を使用した。

(2) TAS-20日本語版(小牧他, 2003; TAS-20)の3因子20項目

(3) 対人ストレス尺度(高橋, 2013)

(4) 心理的ストレス反応尺度(鈴木他, 1997; SRS-18)

(5) 青年期養育尺度(内海, 2013; PAS)

受容、心理的統制、モニタリングの3因子15項目を使用した(7件法)。なお、本調査では教示において「あなたの母親あるいは母親の役割をしていた人が、あなたが生まれてから16歳までに、あなたに接していた態度について教えてください。16歳までの記憶をもとにして、選択肢のあてはまる数字に○をつけてください」と変更した。また、原著論文の項目について対象を母親に変更し、文章を過去形に変えて使用した。変更について原著者である内海に許可を得た。

(6) アダルト・アタッチメント・スタイル尺度(ECR-RS)

回避、不安の2因子9項目を使用した(7件法)。

## 4. 研究成果

### 4-1. MAS日本語版の信頼性と妥当性の確認

MAS60項目について原版と同様の因子分析を因子数の指定をせずに行ったところ、9因子が抽出されたが固有値の推移は第1因子が高く、ほぼ第1因子に項目が集約された。なお固有値の推移からは3因子もしくは4因子が妥当と考えられた。そこで、因子数を原版の3因子に指定して同様の分析を行ったが、第1因子に42項目、第2因子に12項目、第3因子に6項目となり、最初の検討と同様に第1因子に大半の項目が集約されることとなった。その後、因子分析の開始をバリマックスからプロマックス、主因子法に変えて実施したが、因子のまとまり方は同様に第1因子に大半の項目が集約された。項目削除を繰り返しながら探索的因子分析を行うことも考えたが、第一に原著者であるJuristのメンタライズされた感情認識の理論に基づいた尺度を検討することが重要であること、原版の60項目は項目数が多すぎて臨床で使用しにくいだけ項目削除を行う必要があること、感情処理に関する文化差も考慮して検討する必要があることを理由に、Greenberg et al (2017)の3因子モデル(Identifying, Processing, Expressing)の項目通りで共分散構造分析による確認的因子分析を行うこととした。既述の理由から確認的因子分析による推定値の標準化係数が有意ではない項目と推定値が.60以下の項目を削除することを数回繰り返し、最終的に残った3因子17項目でモデルの適合度はCFI=.881, AGFI=.843, RMSEA=.087となった。モデルの適合度としては最適とまでは言えないものの最低限の適合度は得られたと考えられる。ちなみに、Rinaldi et al (2017)が報告しているイタリア版の5因子モデルも検討したところ、1因子が削除され、最終的に4因子構造となったがモデルの適合度は3因子モデルよりやや劣る程度であった。

本研究で最終的に採用したのは、過去の家族や人生の出来事と結び付けて感情を理解したり、自分の気持ちや他者の感情に注目し、感情の複雑さを理解しようと努めることを反映したIdentifyingの7項目( $\alpha = .887$ )感情のコントロールや感じたくない感情の調整、状況に合わせた感情調整、ポジティブ感情の持続や求める感情を高めるといったメンタライズを反映するProcessingの7項目( $\alpha = .886$ )そして、感情表出回避を選択しないことや感情表出の保留や抑制をしないことをメンタライズするExpressingの3項目( $\alpha = .762$ ; 全て逆転項目)であった。最終的に採用された3因子についての基準関連妥当性を検討する尺度との相関係数を算出したところその妥当性は確認された(Table 1)。また、3か月半後の3因子の再検査信頼性を検討したところ全ての尺度において高い信頼性を示した(Table 2)。

Table 1. MAS日本語版3因子の基準関連妥当性の検討

	ERQ-J			TAS-20			合計
	自尊感情	再評価方略	抑制方略	感情同定困難	感情伝達困難	外的志向	
Identifying	.28 **	.52 **	.13 **	-.03	-.04	-.55 **	-.23 **
Processing	.57 **	.59 **	.21 **	-.25 **	-.33 **	-.27 **	-.36 **
Expressing	.11 **	-.20 **	-.45 **	-.04	-.33 **	.27 **	-.05

Table 2. 3か月後の因子間相関

		Post (3か月後)		
		Identifying	Processing	Expressing
Pre	Identifying	.77 **	.46 **	-.29 **
	Processing	.45 **	.76 **	-.13
	Expressing	-.19 **	.16 *	.58 **

#### 4 - 2 . MAS 妥当性検討のための親の省察機能質問票 (PRFQ) 日本語版作成

MAS 日本語版の妥当性確認で使用する可能性を念頭に、PRFQ-J の日本語訳 18 項目について探索的因子分析を行い、固有値の推移から 3 因子が妥当と判断し、3 因子を指定し、プロマックス回転を行った。その後、因子負荷量が .35 未満の項目を削除し、最終的に 16 項目で構成される因子構造を確認した。第 1 因子は「確信的推察」、第 2 因子は「省察不全」、「省察的姿勢」と命名した。係数は「確信的推察」が  $=.861$ 、「省察不全」が  $=.805$ 、「省察的姿勢」が  $=.805$  であった。基準関連妥当性の検討を行った結果、確信的推察は、自己の内面への意識、育児自己効力感と有意な正の相関を示し、省察不全は育児自己効力感と負の有意な相関、省察的姿勢は他者の内面への意識、自己の内面への意識、育児自己効力感の全てと有意な高い正の相関を示した。また、アレキシサイミア傾向を測定する TAS-20 との関連性については、確信的推察は感情伝達困難と有意な負の相関、省察不全は感情同定困難、外的志向と有意な正の相関、省察的姿勢は外的志向と有意な負の相関であった。おおかた親の省察機能質問票の 3 因子の妥当性が示された。

#### 4 - 3 . メンタライズされた感情認識尺度の妥当性確認

大規模調査に引き続き、MAS 日本語版の基準関連妥当性を確認するために該当する尺度との相関分析を行った結果、MAS の第 1 因子である Identifying は、援助要請過剰、援助要請自立、ソーシャルスキル (関係開始、解説、主張性、関係維持、記号化) Ten Personality (外向性、協調性、勤勉性、開放性) と有意な正の相関が認められた。また、第 2 因子である Processing は、援助要請過剰、援助要請自立、ソーシャルスキル (関係開始、解説、主張性、感情統制、関係維持、記号化) Ten Personality (外向性、協調性、勤勉性、開放性) と有意な正の相関、神経症傾向とは有意な負の相関が認められた。第 3 因子の Expressing は、関係開始とは有意な正の相関が認められたが、解説、関係維持と有意な負の相関であり、援助要請回避と援助要請自立とは負の有意な相関関係が認められた。また、外向性と有意な正の相関、神経症傾向と負の有意な相関が認められた。

#### 4 - 4 . アレキシサイミアの対人関係、対象関係

TAS-20 合計得点との相関関係を検討した結果、アレキシサイミア傾向者は援助要請過剰、援助要請回避が高い一方で、対人ストレス経験は全ての因子で高く、ストレス反応も有意に高いことが明らかとなった。また、情緒的依存と道具的依存は弱い正の相関であり、対象関係に関しては親和不全、自己中心操作、一体希求、見捨てられ不安といずれも高い有意な正の相関を示した。また、Ten Personality (外向性、協調性、勤勉性、開放性) とは有意な負の相関を示し、神経症傾向とは有意な正の相関を示した。ソーシャルスキルに関しては、関係開始、解説、主張性、感情統制、関係維持、記号化と有意な負の相関を示した。なお、TAS-20 の下位尺度はそれぞれ多少異なる相関を示しており、アレキシサイミアの下位構造によって対人関係や対象関係との関連性の強さは異なることが示唆された。

#### 4 - 5 . 母親との過去の養育体験がメンタライズされた感情認識に及ぼす影響

まず、アレキシサイミア傾向と過去の養育体験の 3 つの下位尺度との相関を算出したところ、TAS-20 合計得点は、受容とモニタリングと有意な負の相関、心理的統制とは有意な正の相関を示した。また、愛着スタイルに関しては回避と有意な負の相関、不安と有意な正の相関が認められた。一方で、メンタライズされた感情認識尺度との関連性については、Identifying は受容とモニタリングと有意な正の相関、回避とも有意な正の相関、Processing は、受容とモニタリングと有意な正の相関、愛着スタイルの回避と有意な正の相関、不安とは有意な負の相関が認められた。Expressing に関してはいずれも有意な相関は認められなかった。

次に、過去の母親からの養育体験がメンタライズされた感情認識に影響を与えるパスモデルを共分散構造分析で検討したところ、受容は Processing に .28 で影響し、モニタリングは Identifying に .28 で影響し、更に Identifying から Processing へ .30 で影響するモデルが算出された ( $GFI=.952$ ,  $AGFI=.890$ ,  $RMSEA=.12$ )。また、過去の養育体験がアレキシサイミアに与える影響については、受容から -.27、心理的統制から .21 であった。また、過去の養育態度からメンタライズされた感情認識を媒介してアレキシサイミア傾向に影響するモデルを予備的に検討したところ、受容が Processing に .33 で影響し、Processing から感情同定困難に -.39、感情描写困難に -.51、モニタリングは Identifying に .26、Identifying から外面志向へ -.57 であった。過去の養育体験からメンタライズやアレキシサイミアを媒介してのストレス経験やストレス反応への影響について幾つかのモデルを検討中である。以上の結果は、メンタライズされた感情認識に関しては第 2 因子の Processing が高まることがアレキシサイミア傾向の改善に影響する可能性が高いことを示唆しており、更に、ミラーリングするようなモニタリング的関りをする事で Identifying のメンタライズが促進され、それらが外面志向の改善に影響する可能性を示唆するものである。更に詳細な分析を行い、アレキシサイミア傾向を改善することに繋がる側面を明らかにしていくことが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 馬場天信・上地雄一郎
2. 発表標題 メンタライズされた感情認識尺度日本語版の作成 成人を対象とした信頼性と妥当性の検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第30回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 馬場天信
2. 発表標題 メンタライズされた感情認識尺度（MAS）日本語版の信頼性と妥当性の検討：アレキシサイミア傾向との関連性
3. 学会等名 第65回日本心身医学会総会および学術大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上地 雄一郎  (KAMIJI Yuichirou)  (80161214)	岡山大学・社会文化科学研究科・特命教授    (15301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------